
水晶塔の枷姫

紫吹 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水晶塔の枷姫

【Nコード】

N3496T

【作者名】

紫吹 零

【あらすじ】

重傷を負った青年ザハトは、たまたま水晶塔にたどり着いた。そして塔を上り、最上階について、一人の少女に出会う。足首までのびた美しい蒼のグラデーションをした波打つ髪に、ターコイズのような瞳を持った少女。しかし彼女の両手足には銀の枷があった

共に過ごすうちに、たがいに惹かれあうようになったザハトと姫。しかし運命は、二人をあっけなく引き裂いていく

プロローグ

歌え

一人孤独に。

歌え

この暗い、塔の中で。

歌へ

この気持ちと、

歌へ

想いを乗せて。

遠くにいる、あなたに届くよう

もう駄目だと、ザハトは本能で悟った。

流血する腹のまま、これ以上走ったところでもうどうしようもならないと思った。だから、最後に逃げた洞窟で、死のうと思った。

でも、死ぬなら入口ではなく奥の方がいい。そう思い、先を進んだ。そして、ザハトは見つけた。

なんで

こんなところに、塔があるのだろうか？

ザハトはぼつかりと空いた入口（穴？）を見つめた。塔だと分かったのは、奥に進んでたどり着いた開けた広い空間にあったからだ。高い天井につくぐらい高い細長い建物。これを塔と呼ばずに何と呼ぶ？

ただ、その塔は普通ではなかった。薄暗い洞窟の中、ぼんやりと光っていた。ザハトが近付いてよく見ると、なんと全てが水晶で出

来ていた。

(何だ、コレ……?)

気になった。

だから、ザハトは決意した。

どうせ死ぬんだから、せめてこれかなんとか確かめてから死のう。

そして、入口をくぐった。

? First meeting

ふいに顔を上げた。長い髪が顔にかかる。

(誰……か入って来た)

困惑と驚き、そして好奇が湧きあがるのを感じた

「階段長っ!!」

ぜえぜえと荒い息をしながらザハトは階段を上っていた。塔に入ると、すぐに螺旋階段があった。というかそれしかなかった。なので、上るしかないのだ。

しかし腹からは絶えず血がどくどく流れている。ザハトの視界も、だんだんとかすんできた。

(……マジ、ヤバいかも……)

内心そう思い、ザハトはへらへら笑った。

俺は、こんなところで惨めに死ぬのか
だけど。

(俺みたいな人間には、相応しい最後だな)

そして、ザハトは思った。

(……何で俺、上ってんだろ?)

もう死んでいいなら、ここでいいじゃないか。

なのにどうして、俺は階段を上ってるんだ?

階段を上りながら、ザハトは考えた。だけど一向に答えは出なかった。しかしザハトは立ち止らないで、階段を上り続けた。

気の遠くなるほど階段を上り、上り、上った。

だんだんと遠のきそんな意識の中、どうしてかザハトは上った。

いつもは途中で投げだしているのに、どうして今回は諦めないんだろうか? あの時だって、放り投げて逃げ出したくせに

最後だから？

そんな自問自答をしながら、ザハトはとうとう最上階にたどり着いた。最上階と分かったのは、それ以上上に行くための階段が無かったからだ。それに最後の階段を上ったら、そこは小さめのフロアとなっていて、向かいに小さな扉があった。同じく水晶で出来ている。

そういえば、階段も手すりも水晶だったな……とザハトは思った。透明、ではないが、少し蒼みを帯びたアイスブルーの水晶。

ザハトは扉に向き直った。そして小さな、やはり水晶で出来たノブを掴み、ぐいっと回して引っ張った。きしみもしないで、扉はすっと開いた。

その先に現れた物を見て、ザハトは呻いた。

「また階段かよっ！！」

畜生、何なんだよこの塔は……

そうぐちぐち言いながらも、ザハトはまた階段を上る。しかし今度はそんなに長くなかった。すぐ先から光が漏れているし、螺旋階段でもなかった。

だけどその一段一段が、ザハトにとっては苦痛だった。

ようやく上りきった時は、もう意識は朦朧とし始めていた。

(……あ、と少し　　なんだ……)

必死に意識を保ちながら、ザハトは最後の気力を振り絞って、光の漏れる部屋にほとんど倒れこむ形で入った。

青白い月明かりに照らされた、質素な部屋。家具などあまりなく、生活感がなかった。森の仮小屋でも、もっとまじだろうと思ってしまう。ある物といえば、黒いテーブルと二脚のイス。それからクロ―セット。それだけだった。

(……なんだ、これは？)

そして目を見張るザハトの黒曜石のような瞳に、信じられないものが映った。

長い長い蒼い髪

毛先にいくに連れてだんだんと色の薄くなるグラデーシヨンの不思議な髪。そして二粒のターコイズの宝石。

それからどこからか伸びている銀の鎖。繋がる先は、細い手首。そして足首。

少女がいた。

長い長い蒼の髪と、ターコイズのような瞳を持った、銀の枷に繋がれた少女が、じつとザハトを見つめていた。

しゃらり

少女がかすかに手を動かしただけで、枷は大きな音を立てた。

どうしてこんなところに？

そう思った時、ザハトの意識の糸が途切れた。深く沈む意識の中で、ザハトが最後に見たのは、二粒の極上のターコイズの宝石だった。

突然入って来た誰かに、彼女はターコイズの瞳を大きく見開いて誰かを見つめた。相手も、ポカンとして彼女を見つめている。

しばらく、沈黙が下りていた。

彼女は動揺で、膝にそろえて置いていた両手が少し動いた。ほんの少しなのに、彼女の細い手首にはまった枷がしゃらりと軽やかな音をたてる。

そしたら、誰かはふらりとふらついた。そしてそのまま驚く彼女の目の前で、誰かは倒れた。反射的に駆け寄った彼女の目には、誰かの黒曜石の瞳がこつちを見たのが分かった。支えようと手を伸ばしたが、それはかなわなかった。

「ど、どうでしょう……」

突然すぎる出来事に慌てながら、彼女はとりあえず誰かを仰向けにした。そして、はっと気が付いた。

「……凄い出血っ！」

まだどくどくと血が流れているわき腹を見て、彼女は息を呑んだ。ハッキリ言って、この傷でここまで来れたのは奇跡だ。もういつ死んでもおかしくないかもしれぬ。

傷口に手を伸ばしかけ、途中で彼女は動きを止める。彼女の頭にある光景がよぎる。

ば、化け物!!

く、来るなあっ

彼女はぎゅっと拳を握った。身体が震える……。

ターコイズの目が曇る。だけど再度、鮮やかな鮮血を見た瞬間、ターコイズの瞳から迷いが消えた。彼女は誰かの頭をそっと抱える

と、彼女はそつと目をつぶる。そして優しく、優しく囁いた。

「大丈夫。わたしがここにいるから」

誰かの瞼がぴくりと動いた。

彼女はふわりと微笑んで、右手をそつと誰かの傷口に触れた。

二人は、ぽおつと出てきた淡い光に包まれた。

「ザハト」

明るい笑い声とともに、名を呼ばれた。振り返れば、艶やかな黒髪に濡れたように光る大きな瞳。

「

声をかけようと、名を呼ぼうとした時、しかし彼女は身をひるがえして走って行ってしまった。思わずあとを追おうとした。しかし、彼女が向かった先にいた人を見て、ザハトの身体から血の気が引いた。

柔らかな朽葉色の髪に、黒曜石のような目の男。容貌は、ザハトと瓜二つだった。

しかしザハトの髪の色は真紅だ。血よりも濃く、鮮やかな赤。そこだけが、あの男と違った。

ザハトの全身から、冷や汗が出る。震えも、止まらない

「ザハト」

ザハトと同じ声で、顔で、男は嗤う。その隣で、彼女も笑う。

呆然とするザハトのわき腹に、突如激痛が走った。見れば、槍がわき腹に刺さり、流血していた。

「無様に逃げ、そして一人孤独に、死ぬがいい」

嘲笑う声から、男の目から、そして彼女の前から逃げるようにザハトは走った。痛みで何度も気を失いそうになりながら、それでも走った。

『大丈夫』

何処からか、優しい、優しい声が聞こえた。その声で、ザハトは立ち止った。その声は、何よりもザハトの心を落ち着かせた。

『わたしがここにいるから』

どこに？

聞くまでもなかった。ザハトはすぐに、優しいものに包まれた。

これなら

全てをゆだねることができる。

ザハトは安心して、目を閉じた。だんだんと、痛みが引いてきた。

? Healing power

どこからか、歌が聞こえる

霞がかかったようにぼんやりとした意識の中で、ザハトは思うといふより感じた。

歌はザハトの知らない歌で、ザハトの知らない言葉で歌われていた。意味は分からない。だけど、不思議と心が落ち着いた。優しい歌だと思った。

ザハトはゆつくりと目を開ける。真つ先に映ったのは、水晶の天井。一瞬迷い、そしてザハトはすぐにここがどこだか思い出す。大怪我して見つけた、あの水晶の塔の中だ。

ふいに、歌が途切れた。

「目が覚めましたか？」

歌っていた声が、語りかけてきた。そっちにゆつくりと視線を動かすと、ゆるく波打つ青のグラデーシヨンの髪が視界いっぱい飛び込んできた。でも、ザハトの目をとらえたのは二粒の極上の宝石のような瞳だ。

ターコイズの瞳

「……あんたは？」

かすれた、頼りない声が口から出た。そういえば、非常にのどが渴いている。

水が欲しい。そう思った瞬間に、となりから水のたっぷり入ったコップが差し込まれた。反射的に受け取るうとしたが、なぜか手が上手く動かない。

「そのままでもいいですよ」

彼女　　そう、彼女だ。彼女はザハトの口元にそつとコップを持ってきた。ザハトはおとなしくそのまま飲ませてもらった。

「ゆつくり、口に少しずつ含んでから飲んで下さい。少しずつです」
言われた通り、ザハトは飲んだ。乾いた身体に、一口ずつがじん

わりと染み込んだ。

全て飲むと、ザハトはゆっくりと彼女に支えられながら上半身を起こした。

「調子はどうですか？」

「……まあまあだ」

ザハトは怪我したはずのわき腹を見る。清潔な包帯が巻かれている。痛みもほとんどない。

「……お前が助けてくれたのか？」

「はい」

「……そうか。」

ありがとな

「いいえ」

彼女はにっこりと微笑んだ。笑顔も、とても優しかった。

「俺は、どのくらい眠っていた？」

「三日です」

「嘘をつくな」

ザハトは彼女を軽く睨めつけた。しかし彼女はキョトンとして言う。

「嘘じゃありませんよ」

「いや、嘘だ」

ザハトはゆっくりと腹の包帯を外した。彼女は止めなかった。外した包帯の下は、かすかな傷跡を除いて、完治していた。

「俺は、戦争に行ったことがある。だから、知っている。あの怪我が、三日で治るわけない。もう一度聞く。俺はどれくらい眠っていた」

「ですから、三日です」

さらに何か言おうとしたザハトを、彼女がため息をして諭す。

「……本当は言いたくなかったんですけど。言わなかったら、あなたは納得しませんよね」

「当たり前だ」

彼女はもう一度、ため息をつく。諦めたような、ため息だった。

「言っても、信じてもらえないかもしれないかもしれませんが。わたし、不思議な力があるんです」

そう言うと、彼女はさっきザハトに水をやったコップを手放した。パリンと音を立ててガラスが飛び散る。

「……おい」

意味が分からず困惑するザハトの前に、彼女はしゃがんでガラスを集め始めた。破片はいともたやすく彼女の白くて細い指先を傷つける。ぷくりと赤い血が盛り上がるのを見て、ザハトは止めようと寝台から降りようと……止った。

彼女は集めた破片に手をかざしていた。その手が淡く輝いたと思うと、みるみる破片がくっついていく。驚きで声も失うザハトの前に、コップは完全に再生していた。

「これが、わたしの力です。再生の力」

立ちあがった彼女の手の先の血も、いつの間にか消えていた。

? Her is name

「……なんだと？」

「ですから、再生の力だと」

ザハトは耳を疑った。再生の力？ しかし確かにそんな力があれば、傷はすぐに塞がる。それで三日眠れば

辻褃は合う。しかし

「信じられねえ」

「ですよね」

彼女は笑顔で言った。

「信じるも信じないもあなたの勝手です。ですがわたしの言葉は間違いなく真実です。それをどうとるか、あなたの自由ですから」
彼女は寝台の近くのイスに座った。そしてにこにことしてザハトを見ている。

ザハトは困惑した。どうするべきだろうか

？

ふと、一つだけ思った。

「……お前、名は？」

「ありません。」

いえ、捨てました」

「捨てた？」

「はい」

「なぜ……」

「わたしは、罪深き人間なんです。生まれてきてはいけなかつた子。人の身に余る力を持って生まれてしまった……。だから、わたしはここにいます」

彼女はそのあと、あなたの名は？ と聞いた。ザハトが名乗ると、

彼女は笑った。

「^{ザハト}幸ですか……。よい名です」

「……あんまり気に入ってねえんだ」

「なぜ？ とてもよい名なのに」

男で幸はねえだろ。

ザハトはそう言うのだが、彼女はただ笑った。別にいいと思いますよ、と言っ

「ザハト。あなたはウィルマシア、という国を知っていますか？」

「……俺の生まれた国だ」

「そうなのですか！！」

彼女はぱあつと顔を輝かせた。しかし次の瞬間には、その顔は暗く陰った。

「では、この文献は知ってますか？ ウィルマシア年鑑」

「ああ。家にあった」

「読みました？」

「読まされた」

「全巻？」

「ああ」

「そうですか」

ザハトには彼女が何でこんな話をするのか分からなかった。

「年鑑の五か六ぐらいに、一人の少女の話が乗っていたでしょう」

「……《災呼ぶ子》か？」

「……ええ」

ザハトはその話を思い出そうとした。確か、生まれた時から群を抜いて美しい子だったが、大きくなるにつれて彼女の周りでは災いが絶えなかった。そして、ウィルマシアを混乱に陥れ、後に大暗黒時代と呼ばれる災害や病気を蔓延させた張本人。最後にはウィルマシアから姿を消した。

「だけどその話はもう六百年は前の話だろう。なんの関係が」

「《災呼ぶ子》は、長い不思議な青の髪と青い瞳の少女。

と、年鑑に乗っていませんでしたか？」

そう言われて、ザハトの頭に一つの絵が浮かんだ。年鑑の挿絵の、蒼の不思議なグラデーションをした髪と、青の瞳の美しい少女が妖

しく微笑んでいる絵。幼い頃に見たが、とても美しく、そして怖い
と思った。

その絵の《災呼ぶ子》と、目の前の彼女がだぶる。

ザハトは頭を振った。そんなはずない。《災呼ぶ子》がいたのは
六百年も前の話だ。

「わたしと《災呼ぶ子》の挿絵が似てますか？」

「……ああ」

「ふふつ。挿絵を書いた人は、わたしを見たことがあったのですね
……何言ってるんだ？」

「わたし、この塔に六百年ぐらい繋がれているんです」

ザハトの思考が、止った。

「《災呼ぶ子》がウィルマシアから姿を消したのは、自分で作っ
たこの塔に繋がれたからです」

しゃらりと、彼女の手の枷が鳴った。ザハトは、絞り出すように
して言う。

「お前が、《災呼ぶ子》……」

「オルフィリア。それがわたしの捨てた名です」

? Her is name (後書き)

会話が早い……

? T h e t r u t h

「……嘘だろ」

「嘘じゃないです」

彼女

オルフィリアは少し寂しそうな笑顔で言った。

「わたしがこんな力を持って生まれたせいで多くの人が傷ついた。わたしが生まれてこなければ、なんの問題もなかったはずなのに。わたしは誰よりも重い罪を犯した。だから、わたしはここにいるんです」

オルフィリアは手の枷を見る。華奢な鎖はどこまで続いているのか分からないほどに長い。

「これは、わたしの力を吸い取り、この塔に吸収させています。わたしの力を全て奪った時、わたしはようやく死ぬのです」

「なんでそんなこと……」

ザハトの疑問に、オルフィリアは笑顔で答えた。

「こんな力を持ったまま死んだら、また誰かがわたしのような運命に会っんです。そんなの、可哀そうすぎます。ですから、あの世には持っていかず、この世にこの水晶の形で残していけば……。次にわたしのように重い罪を背負って生まれてくる子はいないはずですよ」

ザハトの頭に、オルフィリアが先ほど言った言葉がよみがえる。

『わたしは、罪深き人間なんです。生まれてきてはいけなかった子。人の身に余る力を持って生まれてきてしまった』

なんとなく、その意味が分かったような気がした。

「……お前、優しいんだな」

気付いたら、ザハトはそう呟いていた。オルフィリアが目を丸くする。

歴代の悪女のように、自分がやっていることを悪く思わないよう

な奴だつたら、オルフィリアはここにいないだろう。自分の力を恨み、他人に危害を与えることを苦しく思う。だからこそ、彼女は今ここで六百年もの間繋がれているのだ。

優しいから。優しすぎる人だから。自分の力が他人を苦しめることが辛かったのだろう。

「……ザハトは、不思議な人です。だから、余計なことまで話してしまつた」

ちよぴり後悔してます。でも

「う、嬉しかったです」

白い頬を少しだけ赤が差していた。

「オルフィリア……」

「その名は、呼ばないでください」

ザハトにオルフィリアは優しく、しかし鋭く注意する。

「でも、呼ぶ時困るだろう」

「好きにつけていいですよ。ポチでもタマでも」

「犬や猫じゃねえんだ」

ザハトは少し考えた。

「……ルティアラ」

「え？」

ふいに口から出た名に、ザハトはぎよつとなつた。慌ててまた考える。

「いや。そうだな……」

そして、思いついた。

「ルーフィリナ。祝福ルに青フィリで青の祝福！」

どうだ？ と言つたザハトに、オルフィリアは口の中で出来立てほやほやの名を転がす。

いいかもしれない。

オルフィリアは小さく、だけどハッキリとうなずいた。

「これからお前は、ルーフィリナだ」

オルフィリア

改めルーフィリナは、笑顔を浮かべた。

「

「何か言ったか？」

「ううん」

ルーフィリナは笑顔で何も言わなかった。

聞こえなかったらしい。

だって、二回目はちょっと恥ずかしいから。

『名前をくれてありがとう』

なんて。

「

? Budding feelings

ザハトは「念のため」というルーフィリナの言葉により、数日は寝台で過ごした。その間は、二人で他愛もないおしゃべりをしたり、ルーフィリナの作ったというこの水晶塔について尋ねたりした。

「なんでこの水晶光ってんの？」

「わたしの力を吸ったので、今は水晶ではなく魔水晶というのが正しいです」

「魔水晶って光るのか」

「はい」

「じゃあ、何で青いんだ？」

「さあ？ 多分、わたしの目の色が青だから……」

「目が赤ければ、赤くなるのか？」

「おそらく。わたしはある文献でこのやりかたを見て実践しましたから、きつと他の方もわたしのようなことをしたのかもしれないし。その文献には、翠になったと」

「へえ」

ルーフィリナのいれてくれた茶を飲みながら、ザハトは相槌を打つ。

彼女は実に不思議だった。

しかしそれが興味深くて、面白いと思った。

「……ルーは俺の過去を聞かないのか？」

そう尋ねたザハトに、ルーフィリナは曖昧に微笑んだ。どちらともとれる。ザハトには、ルーフィリナが自分のほうから言いだしてくれるのを待っているんだと感じた。

「ルーはやっぱり優しいな」

ザハトはそう言っつて、彼女の長い緩やかに波打つ青い髪を撫でた。ルー、というのは彼のつけた愛称だ。自分でつけたくせにルーフィリナは長いとかぬかしたザハトは、以来ルーと呼ぶようになった。

ルーフィリナは得に嫌ではないので何も言わなかった。

ただ、彼に名を呼ばれるととても嬉しかった。

いつからか孤独のあまり淋しいという感情を忘れていたが、彼と会って過ごして、楽しいと感じた。だから、彼を失ったらどうなるか分からず、怖かった。

今まで、ルーフィリナにこんなふうに接してくれた人はいなかった。皆ルーフィリナを恐れ、嫌悪し、さげすんだ。

そんなルーフィリナに出来た、話し相手。

永久でなくて構わない。でも、少しでも長くザハトと一緒にいたい。

それが今のルーフィリナの願いだった。

? Confession

「ルー」

ある日のことだった。突然名を呼ばれたルーフィリナは、ザハトの顔をしっかりと見た。彼の決意した表情を見て、ルーフィリナはターコイズの瞳を細めた。

「聞いて欲しい事があるんだ」

「はい」

「俺は」

少し間を開けて、ザハトは告白した。

「俺は、兄を殺したんだ」

ザハトはウイルマシアのさる貴族の二子として生を受けた。年子の兄ザードとは仲もよく、ザハトは彼をとて慕っていた。

そんな二人の兄弟には、一人の幼馴染がいた。父と仲の良い貴族の一人娘で、名をルティアラという艶やかな黒い髪に濡れたように光る大きな瞳の美しい姫だった。そして、彼女は幼くしてすでにザードの婚約者だった。

ザハトはルティアラを姉のように慕っていた。ルティアラもザハトのことを弟のように思ってくれていた。ザハトはザードとルティアラといるのが幸せだった。

しかし、少しずつ大きくなった時、ザハトのだんだんとルティアラを慕う気持ちが変わっていった。姉のように慕う気持ちから、恋慕へと。

ザハトは絶望した。けして実らない恋だった。

それに気付いてしまっただけからは、幸せそうな二人を見ているのが辛くて、ザハトは騎士に志願した。ウィルマシアはつい最近ま隣国と戦争していたので、騎士として志願すれば二人から離れられる。そう思ったのだ。

彼はとうに気が付いていた。ザードも、ルティアラも互いを想い合っていることに。

だからこそ、辛かった。彼らの邪魔は出来ない。しかしどんなに消そうと思っても、ルティアラへの気持ちは消えなかった。

戦争でも、死を迎えそうな場面でも、気が付けばルティアラを思い出していた。

そして、戦争は終わり、ザハトは家に戻った。家に最後に帰って来たのは二年前。気が付けばもうすぐ三年だった。

ザードは笑顔でザハトを迎えてくれた。よく帰って来てくれたと。しかしその隣にルティアラの姿はなかった。

『兄上、ルテイ姉上は？』

『……ルテイとは婚約破棄をした。俺には、新しい婚約者がいる。紹介しよう』

一度不可解そうな顔をした兄だが、新しい婚約者という貴族女性を紹介するときにはとても笑顔だった。ザハトはふにおちなかったが、とりあえず兄の新しい婚約者を歓迎した。

それから数日後、ザハトはルティアラの家を訪ねた。そして知った。ルティアラの父は戦死していた。悲しみに包まれた屋敷でルティアラにあった時、彼女は言った。

『ザードが、わたくしを捨てたの』

『兄上が？』

『そう。わたくしにはもう利用価値がないんですって』

『まさかっ。兄上がそんなこと言うわけ……』

『言ったのよ、ザハト。わたくしをもう必要としてくれる人なんていない……。お父さまも、そしてザードもわたくしを捨てた。悲しいわ……。もういつそ、死んでしまいたい……。』

『俺がいる！俺がルティ姉上……いや、ルティアラを必要とする！』

気が付けば言っていた。はっとして後悔の念が頭をよぎったが、ザハトは振り払った。ルティアラの濡れたように光る大きな瞳に見つめられて、理性など吹っ飛んだ。ザハトはしっかりとルティアラを抱きしめて、言った。

『俺は、ずっとあなたを愛していた』

『……本当？』

『ああ』

『言葉だけなんて信じられないわ。だから、行動で示してちょうだい』

『なんなりと』

ザハトは詰まることなく言った。そんなザハトから離れ、ルティアラは赤い紅をひいた唇を吊り上げて優雅に微笑んだ。

『ザードを、殺して』

一瞬、ザハトの思考と呼吸が止まった。しかしすぐにルティアラと目が合い、ザハトはうなずいていた。

彼女を捨てた男など、俺が殺してやる

『分かった』

ザハトはうなずいた。

そしてその夜、ザハトはザードを殺した。しかしその時ザードは言った。

『ルティアラは、父上の愛人だった！俺はその証拠を掴んだから、あの女と婚約破棄をした！落ち着け、ザハト！あの女に騙されるな！！』

しかしザハトはわめく兄の胸に、剣を突き立てた。兄は、絶命した。

兄を殺した直後のことだった。鍵をかけていたはずの扉が空いて、寄り添う男女が現れた。女の方はルティアラ。男の方は

父だった。柔らかな朽葉色の髪に、黒曜石の瞳のザハトそっくりの顔で彼は嗤っていた。

『父上?』

『ザハト、お前何をした』

『……父、上。ルティアラ……』

ザハトは血に濡れた刃を持ったまま、ルティアラに手を伸ばす。しかしルティアラは顔をしかめて、父に抱きついた。

『汚いわ、ザハト。寄らないで』

『だけど、貴女が……』

『本気にしたの? ばっかみた〜い』

今まで聞いたことのない声だった。ザハトは、その場に座りこんだ。

『お前は、ガードを殺した。お前は逃げるがいい、どこまでも。そして俺は追手をかける。十分、時間をやろう。お前はその間に屋敷から出る。十分立つまでは誰もお前を邪魔しない。しかし十分たつたらこの屋敷の全ての者がお前を殺しに行く。鬼ごっここの始まりだ』
とても楽しそうに告げた父に、ザハトは愕然となった。そんなザハトに追い打ちをかけるようにして、父は言った。

『無様に逃げ、そして一人孤独に、死ぬがいい』

ザハトはその場を逃げ出した。

そして逃げる中で、槍で腹を突かれ致命傷を負った。そうして、この水晶塔を見つけて、彼女とであった。

「これが、俺の過去だ」

「頑張ったのですね」

ルーフィリナに顔を向けたザハトは、ぎよっとなった。ルーフィリナが泣いている。いくつもいくつも涙を流して彼女はザハトの左手を触った。

「あなたはあの女に騙された、それだけのことです」

「しかし、俺は兄を殺した」

「でも、兄上はあなたを恨んではいませんよ」

ルーフィリナの言葉に、ザハトはギョツとなった。まじまじとルーフィリナを見れば、ルーフィリナがふわりと微笑んだ。

「分かるんです。わたしの力の一つです」

「そうか……」

「兄上は、あなたにごめんと言いたいそうです。言わないでごめんと」

「そうか……」

ザハトは右手で顔を押さえた。こらえることなど、出来なかった。ポロポロ泣くザハトを、ルーフィリナはそつと抱きしめた。

少しして、泣きやんだザハトはもごもごと礼を言った。

「その……ありがとな」

「いえ」

「それと、俺決めた」

「何をですか？」

「俺は、死ぬまでルーの側に居る」

ルーフィリナは息をのんだ。

「え？」

「俺は、どうやら、その」

ザハトは驚きで目を見開いて微動だにしないルーフィリナを見て言った。

「お前が、そのな、ルーが

好きみたいなんだ」

「本当？」

ルーフィリナの声は震えていた。誰かから好きなんて言われたのは初めてだった。

「本当？」

再び同じ問いをしたルーフィリナを、ザハトはためらいがちに抱きしめた。温かいぬくもりの中で、ルーフィリナは聞いた。

「愛してる、ルー」

ルーフィリナは目を閉じた。その言葉はまるで太陽のようにルーフィリナを明るく照らした。

「一緒に居て、くれますか？」

「ああ」

一人が、二人になった瞬間だった。

? Happy every day

ここ数百年、ルーフィリナにとって最も幸せな日々が続いた。枷に繋がれる前も孤独で、人に嫌われていたのに、今は自分を必要としてくれる人がいる。それがなによりもルーフィリナを満たした。

「ザハト」

ルーフィリナのことを初めて必要としてくれた人は、そう呼べばすぐに微笑んで応えてくれた。

「どうした、ルー」

「ふふふ」

ふいに零れた笑みに、ザハトは少し困惑したようだった。

「どうした？」

「いえ。ただ、幸せだなんて、思ったんです」

「そうか？」

「はい。初めて他人が好意を示してくれた。わたしはそれだけで幸せです。しかも、ここ数百年誰かと言葉をまじわすこともなかったですから、今が、とても幸福です」

優しい顔に目いっぱい笑顔が浮かべて、ルーフィリナは言った。ザハトはそうか、と言って戸惑いがちにルーフィリナの柔らかな髪を撫でた。ルーフィリナは気持ちよさげに目を細めると、空いているザハトの手を両手で握り自らの頬に寄せた。

「温かいですね……」

「そうか？」

「ザハトの血は赤いですよね。でも、わたしの血も赤いのでしょうか……」

「赤いだろ。人間だし」

当然だろと言ったザハトに、ルーフィリナは目元を和ませた。

「ザハトは、こんなわたしを人間と言ってくれるのですね」

「当たり前だ」

「嬉しいです」

ふわりと微笑んで、ルーフィリナはザハトの手を離す。その時、ザハトはふいに思い出した。

「赤かった」

「はい？」

「前に、俺がなんで怪我が治っているって聞いた時だ。あの時の血は、赤かった」

「ああ、あのときですか」

ルーフィリナは思い出したかのように、うなずいた。そしてすぐに申し訳なさそうな顔で言った。

「あれは、実はわたしの力で色を変えたのです。わたし、自分の血が他人と違うということは知っているのですが、事実、血の色を知らないのです……。怖くて、とても見る気しないんです」

「……そうなのか？」

「はい。それに、出来るだけたくさんの方が使いたくて、くだらないことにも力を使っているのです。呆れました？」

黒曜石のような瞳を見開いているザハトに、ルーフィリナは不安そうに聞いた。そんなルーフィリナにザハトはにやりと笑うと、彼女をそつと抱き寄せる。

「呆れるんなら、とうの昔にここから居なくなってるさ」

「そうですか……」

「ああ」

ルーフィリナはそつと目を閉じた。すると髪の色がだんだんと赤くなっていった。驚くザハトの前で、ルーフィリナはそつと目を開けた。その目も、なんと黒曜石のような黒い色合いに変わっていた。

「なっ」

驚くザハトに、ルーフィリアはにっこりと笑った。

「ふふふ、ペアルックです」

「これも、力か？」

「はい。こういふふうに使うことも可能です。くだらないですか？」

色を元に戻しながら、ルーフィリナは尋ねた。ザハトは笑って首を振った。

「まさか」

この時の二人は、まさかあんなことが起こるなんて思ってたすらいなかった。

? Visitors

ある日のことだった。それは突然、なんと訪れもなくやって来た。最初に気付いたのはルーフィリナだった。ふいに顔を強張らせたルーフィリナに、ザハトは優しく尋ねた。

「どうした？」

「誰かが……やって来ました」

その誰かのただならぬ狂気を感じ、ルーフィリナは戦慄した。思わず耳を両手で塞いだ時、しゅらりと軽やかな音が聞こえて柵の存在を思い出した。ザハトと過ごすうちに、気が付けば忘れていた。

そう、自分は囚われの身。それは自ら望んだものだ。しかし、今はその鎖の存在がもどかしかった。以前　　塔に囚われる前に比べれば、力は格段に劣る。それに比例するように、水晶塔はより鮮やかに輝く。今の水晶塔は、最初は透明だったのに、今やルーフィリナの瞳と同じターコイズのような色合いになっている。

ザハトを護る力はまだ残っているのだろうか？

ルーフィリナにとって、それが一番大切だった。たとえこの身が朽ちてもかまわない。ザハトさえ護れるのなら

ルーフィリナは耳から手を離れた。またしゅらりと軽やかな音を立てて鎖が揺れる。華奢な鎖。しかしそれはルーフィリナにとって、なによりも重いこの世の枷。

とうの昔に果てるはずだった自分。それを阻むのは、この鎖だった。

「……塔の階段を、昇ってるみたいだな」

ザハトが呟いた。その言葉にルーフィリナははっと我に返った。

ザハトの言う通りで、息も絶え絶えに階段を昇ってきているのが分かった。

「ルー」

突然ザハトに名を呼ばれ、ルーフィリナは彼の顔を見つめた。な

なかなか精悍な面立ちのザハトに真つ向から見つめられ、あまり他人に見つめられるという事に慣れていないルーフィリナは思わず赤面する。昔は皆ルーフィリナを見ても、必ず目をそらした。直視すると目が潰れる。そんな噂もあったっけ

そんなことを思い出しながらも、ルーフィリナは返事を返す。

「なんですか？」

「大丈夫だ」

たったの一言。しかしそれなのに、ルーフィリナは自然と安心できた。一人ではない。そのことがなによりも心に染み込

「はい。いざとなつたら、わたしが護りますから」

「それじゃ困る。俺の面目が立たない」

「でも、わたしの方が戦闘能力は上です。だってわたしは《災呼ぶ子》ですよ」

「それは『オルフィリア』だ。『ルーフィリナ』じゃない」

ルーフィリナは一瞬だけ驚いたような顔をしてから、そしてすぐにふわりと微笑んだ。

「そうですね。じゃあ、『ルーフィリナ』は護られる存在なのですか？」

「ああ。護る奴がいる」

晴れやかに言うザハトに、ルーフィリナは微笑みを返す。しかしすぐに優しい笑顔で言った。

「けれど『ルーフィリナ』だって、その護ってくれる人を護りたいんですよ」

「それじゃキリが無いだろ」

「そうですね。ふふふ、ですけど」

ルーフィリナの主張は変わらない。そのことに気が付いたザハトは赤い髪をがしがしとかきながら、困ったように言った。

「分かった。俺に何かあったら、頼むよ」

「はい」

花がほころぶようにルーフィリナが笑った時だった。バン、と扉

が開かれた。二人揃って振り返ると、厳しい顔をした三人の男が立っていた。全員兵士なのだろう。皆鎧で装備している。一人はまだ若く十代だと思われる少年だが、あとの二人は成人した大人のようにだ。片方は二十代後半と思われるたくましい男、もう一人はがっちりした体格の中年の男だ。

彼らはザハトとルーフィリナ

というよりルーフ

イリナを見て、少し困惑しているようだった。

それはザハトも同じだった。しかし彼の場合は困惑ではなく、動揺だった。

ルーフィリナはそれに気付き、ザハトの手をぎゅっと握りしめた。そしてすっと立ち上がり、晴れやかな笑顔で来訪者達に話しかけた。

「一度にこんなに大勢がいらしたのは初めてです。わたしの水晶塔へようこそいらっしゃいました」

「わたしの水晶塔？」

ルーフィリナの言葉に過剰と言ってもいいほど反応したのは若い男だった。彼はじろじろと品定めするかのようにルーフィリナを見て、特に彼女の手首と足にある枷を見てふんと鼻で笑った。

「この塔はすぐにでも解体される。ここはウィルマシアの領土で見つけたのはハイロス公爵閣下であるぞ、娘」

「まあ」

ルーフィリナは驚いた。数百年前と全く変わらないタイプの人間が、まだこの世に居ると知って驚いたのだ。

しかし今の驚きよりも、次の中年の男の言葉がルーフィリナを動揺させた。

「馬鹿者、それどころではない。我々はずいに探し求めていた方を見つけたのだ。ザハト様、ようやく追いつめましたぞ。もう、逃げられますまい」

「そうだな……」

青白い顔で嗤ったザハトに、三人が一斉に武器を構えた。

? Separation

「ザハト」

ルーフィリナは名を呼んで、ザハトの手をぎゅっと握る。

「大丈夫よ」

「いや、無理だろう……。トールはともかく、カルロスとショウデイは強いからな」

呆らめたようにザハトは首を振った。

しかしルーフィリナは、ザハトがどれだけ言おうと自分には敵わない相手だと分かった。彼らはルーフィリナが『オルフィリア』だと知らない。きつとただの小娘と誤っているのだろう。それにザハトもルーフィリナの力をほんの一部の綺麗どころしか知らない。

ルーフィリナは力の解放をしようと思った。その気になればこの三人を水晶に閉じ込めてしまうことも楽勝だ。しかも戦闘をすればより多くの力を消費出来るだろう。日々のちまちました消費よりずっと。この枷のせいで、ルーフィリナの力は使ったら戻らない。だから、ルーフィリナは思った。

出来るだけ多く消費して、あと数十年だけ生きられるように出来たら

ザハトとともに死ねたら

どれだけいいだろう。

「ザハト……」

ルーフィリナはザハトが近くに居たら危ないので、握っている手を離れた。しかしザハトがルーフィリナの手を握りしめた。

「ザハト？」

「力は使えな。お前は『ルーフィリナ』だから」
「でも」

「ルーは、『オルフィリア』に戻らなくていいんだ」

ルーフィリナはそれでも首を振る。ザハトの為なら、捨てた名を

再び使うことなどいとわなかった。しかしザハトはルーフィリナの髪をそつと撫でて、弱々しく微笑んだ。

「じゃあ、俺の前では最後まで『ルーフィリナ』でいてくれ。それならいいか？」

「……分かりました」

不服そうにルーフィリナはうなずいた。ザハトは「いい子だ」と言つてルーフィリナの手を離した。そして三人の男に向き合った。

「俺を、殺しに来たんだろ」

二十代の男

シヨウウデイがにやにやしながら答えた。

「もちろんです。あなたの首をとれば、我々は一生遊んで暮らせるのですよ」

「賞金、かかつてたもんな」

「まさかザハト様がザード様を殺すなんて思つていませんでしたよ。このカルロス、一生の不覚でございます」

中年の言葉に、ザハトはさつと目をそらした。彼は兄の騎士だった男だ。きつと、ザハトに対する恨みは強いだろう。

「ザ、ザハト様……」

唯一少年だけは戸惑つた顔で一同を見渡していた。彼

トールは、ザハトの侍従だった少年だ。重い剣など似合わない。しかしなのに彼はこちらに剣を向けていた。

「さ、さっきのその綺麗な女の子との会話で、その『オルフィリア』って」

「そんなこと気にするなトール！」

シヨウウデイに怒鳴られ、トールは身をすくめながらしかし主張した。

「だって！ ウィルマシア年鑑に出てくる『災呼ぶ子』の名前が『オルフィリア』なんだよ！ それなのにザハト様もその女の子も、『オルフィリア』って……」

「くだらん」

カルロスにも一蹴されて、トールは半泣きになった。そしてしき

りに年鑑が……と呟いている。

「トール。お前……」

唯一トールに憐れんだような表情で話しかけたのはザハトだ。しかし次の瞬間、トールが豹変した。かつと血走った目でザハトを見て、奇声を発して彼に剣をつきだしたのだ。

ルーフィリナは驚きで一瞬出遅れた。そのせいで、剣はザハトの左胸を貫いた。

「僕を、僕を憐れむなああああああ！！」

トールは剣を抜いて言った。しかしルーフィリナの耳には届かなかった。彼女はザハトしか見てなかった。ぐったりと倒れるザハトに、ルーフィリナは悲鳴を上げた。

「いやあああああああああああああああああ！」「ルーフィリナは大泣きで駆け寄った。そしてザハトを抱えて、治療の力を送ろうとしたが、ザハトが止めた。

「どうしてっ!?!」

「やめろ……」

「なんで……」

目から大粒の涙をこぼすルーフィリナに向かって、ザハトは弱々しく笑った。周りでは三人がそれぞれの表情で立っている。カルロスは少し呆然とした顔で、シヨウディは楽しくてたまらないと言う顔で、そしてトールは自分のしたことに啞然としているようだった。

「ごめんな、ルー……」

突然謝られて、ルーフィリナは首を振った。あとからあとから、涙が溢れて止まらなかった。

「謝罪なんて、いらない」

「ごめんな、ルー」

一呼吸置いて、ザハトは言った。

「短い時間しか一緒にいられなくて……」

そう言ったザハトの目から、光が消えた。
彼は、死んでしまった

? Revenge

ルーフィリナはしばらくザハトの亡きがらを抱きしめていた。
そんな彼女に、シヨウデイが話しかけた。

「おい、娘。そこをどけ」

「はい」

「は？」

「許さない」

ルーフィリナは迷うことなく力を解放した。どんという威圧感に、三人は思わず後ずさった。歴戦のカルロスでさえ、その力に恐怖した。

もう、ザハトはいない。だから、『オルフィリア』になろう。ルーフィリナは、名をくれたザハトとともに死んだのだ

彼女はまた名を捨てた。《青の祝福》の名を。そして、今度は名を捨てた。一度捨てたはずの、《災呼ぶ子》の名を。

「……お前は、何者だ？」

オルフィリアに恐怖しながらも、カルロスが尋ねた。オルフィリアは気だるげに髪を後ろに払いながら艶然と微笑んだ。それは『ルーフィリナ』の時の優しい笑みではなかった。美しいが、冷酷さを感じる笑みだった。

「ウィルマシアの人間なのでしょう。ならわたしを知っているはずよ。その少年がさっき言ったものね」

オルフィリアの言葉に、三人は戦慄が走った。

トールがさっき言ったのは、《災呼ぶ子》。つまりは……

「お前が、《災呼ぶ子》？ オルフィリア

「そうよ」

肯定しながら、オルフィリアはもう一つ言った。

「そしてわたしは、お前達がザハトの死体を持ち帰ることなど許さないし、そもそもお前達をここから出す気もないの」

彼女は復讐する気だった。彼女のこの長い時の間で唯一出来た大切な存在を、この手から奪った代償に。オルフィリアは生まれて初めて憎しみに囚われた。

三人がじりじりと後ずさっている。オルフィリアはにこりと笑って、片手を上げた。まるで攻撃の合図のように、しゃらりと鎖が鳴った。オルフィリアはまずカルロスに手を向けて、言い放った。

「お前には、血の鉄槌を」

そう言うつてすぐに、カルロスの身体がはじけてとんだ。シヨウデイとトールは後ずさるのをやめた。そして呆然とオルフィリアを見つめていた。逃げてても無駄だと分かっていた。

「お、俺が殺したんじゃねえ！ こいつだ！ こいつがザハトを殺したんだ！」

シヨウデイがわめいた。オルフィリアは眉をひそめて、シヨウデイに手を向けた。

「お前が一番嫌い。だから、お前には空気の鉄槌を」

ぐしゃんと音を立てて、シヨウデイが地面に倒れた。なにかに押しつぶされているようだ。そしてカルロスのようにすぐには死なず、しばらく苦しみ続けていた。

「た、た、た……」

「助けてほしいの？ ふふふ、いや」

またぐしょんと音がした時、シヨウデイはただの肉体だった。

オルフィリアはトールに向かいあった。トールは剣を放り出し、オルフィリアの足元にすがつた。

「僕は死にたくない！ どうか、どうか……」

「ザハトだって死にたくなかったわ。それを、お前が殺した。わたしは誰よりも、お前を絶対許さない」

「だって、だって……」

「言い訳なんて見苦しいわ。だから、お前は最も苦痛をともなつてから殺してあげる」

オルフィリアはそう言うと、手をトールに向ける。

「カマイタチ」

そう言うと、トールの全身が小さな竜巻に囚われた。絶叫を上げながら、トールは中でどんどん散り散りになっていく。そして一分以上続いた絶叫が消えた時、オルフィリアは竜巻を止めた。

そして、静かになった部屋でオルフィリアはザハトの死体に近付いた。

「ごめんね、ザハト」

また泣きながら、オルフィリアは言った。

「わたし、もう『ルーフィリナ』には戻れない。幸せしか知らない『ルーフィリナ』には。だから、『ルーフィリナ』と一緒に連れてつて。『オルフィリア』はまた捨てるから……」

オルフィリアはザハトの身体に突っ伏した。

そして、声を上げて泣いた。

その声は、哀しく水晶塔に響いた。

エピローグ Song for you

汚れてしまった部屋で、生ある者は枷をつけた青いグラデーシオンをした髪とターコイズの瞳をもつ少女だけ。彼女は今、その中で一番綺麗な死体の側に居た。

しかししばらくして少女はその死体に微笑みかけた。

「埋めて、あげるね」

少女は死体を力で持ち上げて、ゆっくり歩き出した。久しぶりに部屋から出て、水晶塔の螺旋階段を降りた。死体は少女の後ろからふわふわ浮いてくっついて行った。

少女はどこどころに血が付着しているのに気が付いた。そしてそれを愛おし気に眺めながら、ゆっくりと階段を降りた。

そして外に出ようと思った時、しかし枷はそこまで長くなかった。ちようど外まであと一歩というところで、少女は立ち止った。

「ここまでみたい」

少女は少しわきにどいて、後ろの死体を外に出した。ふわふわと浮いていた死体は、洞窟の地面にそつと置かれた。少女はそれを見てから力で穴を掘った。すると死体はまたふわふわと浮き、少女の掘った穴に横たわった。

少女は涙で盛り上がる目をそつとぬぐって、土をかけた。

赤い髪、黒曜石のような瞳。この長い生の中で、初めて愛した人の笑顔、精悍な顔、優しい性格、大きな手。全て覚えている。

「さようなら」

小さく呟いた時、ちようど塚が誕生した。少女は水晶塔の一部を強引に壊して取ると、それに文字を刻んだ。一字一字丁寧に書いていった。

『優しきザハト、ここに眠る。一度は過ちを犯したが、心から悔いていた。そして一人の女に名をくれた。そして、その女の誰よりも』

大切な人だった
ありがとう』

「よし」

そして出来たものを力で塚の前に置き、固定した。これで絶対に誰にも取れない。そう確信しながらも、不安だった。だから少女は唯一と言っていい入口を水晶塔と同じ色の水晶で塞いだ。ここから先は絶対に誰にも通さないと思った。少女の死後も、決して。

少女は枷が届くぎりぎりまで前に出て、跪いた。そして祈るように手を組んで、歌いだした。
ザハトに、だけに向けて

歌え

一人孤独に。

歌え

この暗い塔の中で。

歌へ

この気持ちと。

歌へ

想いを乗せて。

遠くにいる、あなたに届くよう

エピソード Song for you (後書き)

読んで下さった方、本当にありがとうございます。

章のサブタイトルですが、ほぼ直訳になっているので意味が違つかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3496t/>

水晶塔の枷姫

2011年8月15日03時28分発行